

氏名	岡田 守正
学位の種類	博士（地域研究）
学位記番号	国博甲第1号
学位授与の日付	平成26年3月21日
論文題目	近松の作劇法 ―三大姦通物の創作意図をめぐって―
審査委員	主査（教授）細 谷 博 （教授）安 田 文 吉 （教授）富 田 康 之（北海道大学）

## 1. 論文の内容の要旨

本論文は、近松門左衛門作の所謂三大姦通物『堀川波鼓』『大経師昔暦』『鍵の権三重帷子』における近松の作劇法について、物語の構成・展開・登場人物の心情・節付などを要素として、独自の視点から、その創作意図を考察している。

まずは『堀川波鼓』における近松の作劇法だが、二つの論の内一つ目は「小倉彦九郎のお国入りをめぐって」で、論者は従来ほとんど論じられてこなかった彦九郎お国入りの大名行列について論じている。国許へ戻る大名行列は、これまで物語から遊離していると指摘されてきているが、華やかで賑やかな心浮き立つ有様を詳細に描くことで、やがて起る小倉彦九郎家の悲劇と対照的な場面で、前節で検討したような、彦九郎の並々ならぬ心中との鮮やかな対照を描き出す必要があったからである。行列が明るく華やかであればある程、後の悲劇性は益々強くなる。加うるに、帰国後の他家の喜びや賑やかさも、彦九郎家の悲劇を強く訴えることになる。更に、これらの日常的有様と妻敵討という非日常的事件のコントラストを一層際立たせ、結果的に聴衆にその悲しみを強く感じさせるという、本作において極めて重要な役割を担っていると論じている。

続いて『堀川波鼓』において、近松姦通物の初作に見る人物造型を論じる。論者は、その構成について、上方特有のくどさを有する下巻の妻敵討の場面構成は、延享二年（一七四五）七月に竹本座で上演された『夏祭浪花鑑』に影響があるかと思われるとし、大詰のめでたい非日常的な祭礼の賑わいは、その直後に起る、もう一つの非日常的な事件と鮮やかに対照されて、結果的に一層の悲劇的効果をもたらすことになる」と述べ、そして、鳴物をあしらっての殺し場など、歌舞伎的手法を仕組んだ舞台構成のアンサンブルは、陰惨ながら心地よく、後続の世話浄瑠璃にも襲用されるものとなっているのであると結論する。

次に『大経師昔暦』における、大詰の僧侶による法衣の救済について論じる。論者は、おさん・茂兵衛の二人は法衣を掛けられたことで、来世に送られたと考えられるとし、来世に送られても、実際は寺院に匿まれて二人は会えなくなり、恋を成就することができなくなってしまうが、それでも生きていればいつかは結ばれるだろうという、観客に一抹の安堵感を残すための結末だったと結論する。近松は現世と来世との繋がりを殆どの作品に描いており、西鶴との相違点もその辺りにある。西鶴は現世の生き方に重点を置いており、従って、女が恋を得て生き生きする様を見事に描いている。近松は現世から来世までを描くことを常としており、現世で結ばれなかった二人が、来世では結ばれることを観客も願うように作劇している。この僧の法衣掛けはそのような意味だったのであろうと論じている。

上記の近松と西鶴の比較論を補完する意味で、『大経師昔暦』における近松の悲劇的世界の構築について論じている。論者は、ここで、西鶴の「おさん」と近松の「おさん」の比較を行っているが、殊におさんの造型が対照的であるとしている。こういった比較論は他にも見られるが、本論は、元禄初年成立の歌祭文『大経師おさん茂兵衛』・『大経師おさん歌祭文 上・下』・小豆庄兵衛作の踊音頭『おさん茂兵衛』などを用いて綿密に比較研究を行っている。三大姦通物の内、この作品のみが、命を救われる結末は、富も格式もある家柄だが身分が町人の家でのこと故、主人公救済を願望する観客の期待にも応え得たと論じる。

続く『鍵の権三重帷子』では「妻敵討の場」が実際にあった大坂高麗橋から京都の伏見京橋に変えた近松の創作意図について追究している。篠崎東海氏の随筆『不問談』の「山城の京は千ケ年の帝都なれば、名所陳跡神佛靈地甚多き事也。世人の普く知る所也。」や、野間光辰編の『新修京都叢書 第十五巻』「山州名跡志」卷之一の「山城八郡方位之圖」から、伏見京橋のほとは、豊かで清らかな水の流れる宇治川と、三方を山に囲まれた奥まった地形で、さらにその山地の一つに、天竺の靈鷲山に似るとして名付けられた鷲峰山があり、そこは大和の大峰山に対して北大峰と称され、鷲峰山山頂付近は、山の靈氣の漂う

南山城の「仏教の聖地」と言えようと指摘している。さらに、宇治川を三途の川と見立て、向こう岸を来世と見立てたのであろうとする。加うるに、町屋が並ぶ高麗橋の日常的性格に対し、旅宿が並び旅人が往来する京橋の非日常的性格もある。こういったことから、凄惨な妻敵討の場を伏見京橋に置き換えたとする。これは、先行の実話を熟知している観客に対して、「意外さ」「奇抜さ」といった目新しさを感じさせるのに、極めて有効であると考えられるからであると論じる。

最後の論は鍵の権三重帷子の権三おさみの道行をめぐるのだが、論者は、ここで姦通の有無について、様々な先行研究を検討し、未通と結論し、侍の一分のため（夫の出世のため）、あたかも姦通があったかのような言動をし、夫の名誉のために討たれるという行為に出たと指摘。敵役があつての『曾根崎心中』から、敵役が全く登場しない『心中天の網島』を例に、近松の作劇法の進歩発展を指摘する。

## 2. 論文審査の結果の要旨

岡田論文の六編は、いずれも創見に満ちたものと考えられる。『堀川波鼓』のお国帰りの大名行列の重要性について、「妻敵討という非日常的事件のコントラストを一層際立たせ、結果的に聴衆にその悲しみを強く感じさせるようになる」という指摘は的を射たもので、見るべきものである。あわせて上方ものの浄瑠璃作品の特色であるくどさについて、『夏祭浪花鑑』との比較検討行っている点も評価できる。『大経師昔暦』の、「心中でなくとも、法衣を掛ける行為そのものが、来世へ送ることであり、二人を救済するのは、来世へ送ったからである」といった指摘は、全くの創見であり、注目すべきものである。

また、従来論考には見られなかった、何故「東岸居士」なのかの考察は、本作構成上重要な箇所を見事に捉えていて、優れている。歌祭文『大経師おさん茂兵衛』・『大経師おさん歌祭文 上・下』・小豆庄兵衛作の踊音頭『おさん茂兵衛』などを用いての比較研究は興味深い。『鍵の権三重帷子』の最重要場面である妻敵討の場について、詳細に論じられたものは、現在まで全く無く、この指摘は論者の論考中最も優れたものとも思われる。また、姦通を未遂とし、侍の一分のため、あたかも姦通があったかのような言動をし、おさみは夫の名誉のために討たれるという行為に出たという指摘も興味深い。敵役があつての『曾根崎心中』から、敵役が全く登場しない『心中天の網島』を例に、近松の作劇法の進歩発展を指摘する論は実に卓見で、優れたものといえよう。

本論文は、全体として、創見に富み、さらに、資料搜索、および取扱い方に一定の研究能力を見せており、評価できる。また、論文の体裁も整っており、総合的に見て、博士論文として認められる学術的水準に十分に達しているという判断に至った。

平成 26 年 2 月 19 日

審査委員 (教授) (氏名) 細 谷 博  
(氏名) 安 田 文 吉  
(氏名) 富 田 康 之 (北海道大学)